

地域住民、団体、企業と一体となって「共感できるまちづくり」を



川根本町長
佐藤公敏

町の元気再生を図るため
5年ごとに実施される国勢調査の速報値が発表されました。本町人口はこの5年間で916人減少し、減少率は県内で最も高く10・2割となっています。人口規模が小さく、高齢化が高い本町では、人口の増減が町の活力に大きく影響します。人々が暮らし、働き、触れ合うことで「にぎわい」が生まれると考えれば、人口の減少は非常に大きな問題といえます。人口には定住人口と移動人口があります。定住人口は元から住んでいる人と町外から転入してきた人。移動人口は、通勤・通学で町外から本町に通う人と、ビジネスで訪れる人、観光などで訪れる交流人口も含まれます。本町としては、定住人口の増加とともに、観光などでこの地

を訪れる「交流人口の増加」を図ることが、これからの町の将来を展望する上で、重要な要素となってくるでしょう。旧町の時代から大井川電力センターは、地域に密接に関わる事業所として、住民の皆さんと共同歩調を取りながら、地域の活性化に向けたさまざまな活動に取り組みられています。町の元気再生を図るためには、地域にある資源や人材をいかに活用していくかが最も重要ですが、今後、皆さんの声に耳を傾け、自治会、各団体、地元企業とも協力して共感できるまちづくりを進めたいと考えています。本町が目指す「地域の元気再生」地域住民が安心して暮らせるまちづくり」そして「地域住民が主役となって取り組めるまちづくり」はそこから生まれると考えています。

地元にもたらした「行動力」。私たちも手を取り合って進みたい

外の視点をもたらす行動力
寸又峡の落ちない大石は、地元の人たちも存在は知っていたが「資源として活用しよう」という発想にまでは至らなかったのではないかと思います。そこに外からの視点が変わったことで「気付き」が生まれ、若者の熱心な投げかけによって、共感した地元の人たちが前向きになって動き出したんです。そんな「行動力」を地元にもたらしたことが最も大きな効果ではなかったかと思えます。グラウンドゴルフ大会と宿泊プランを組み合わせてやれないかという提案もいただいております。昨年度、商工会観光部会で検討を進めてきました。当然のことながら、私たち商工会だけで実現できるものではありません。

旅館組合や観光協会、町、他の団体とも折衝する必要があるとすし、地域の皆さんとの対話も必要です。何よりグラウンドゴルフ場は地域のものであり、地域の皆さんと共に考えていく姿勢が最も大事と考えます。どのような方法で実現できるか、23年度は具体的に検討を進めていきたいと考えています。井川線関連では、私たちもさまざまな企画を投げかけています。吟醸列車に始まり、鍋列車、花見列車などを実現しました。これは言ってみれば「町内にお金を落とす仕組み」です。検討チームの活動と協力することで、新しい可能性も見えてきます。商工会は今後も、町のために、町民のためにできることを考えながら、皆さんと手を取り合っ



川根本町商工会
菊池松巳 会長

地域の守り神である落ちない大石を「守り生かしていく意識」が芽生えた



寸又峡美女づくりの湯観光事業協同組合

望月孝之 理事長

大石は「地域」の守り神
その昔、天狗が山を下り、この寸又峡・外森山に五穀を落としたことで、地域が形成されたという言い伝えが残っています。その時、天狗が降り立ったとき、それがこの「天狗の落ちない大石」です。受験生や落ちてはいけない職業（大工など）の人たちに守り神として信仰されていますが、本来は「この地域の守り神」ともいべき存在でもあるのです。しかしながら、これまで効果的なPR方法も見つからず、人

知れず埋もれた資源となっていました。町外の人はもちろん、町内の人ですら知らない人が多くいのではないのでしょうか。もっと活用方法を模索しなければ、PRしなければと考えていたところに一昨年、大井川電力センターの検討チームの皆さんから活性化の起爆剤にと提案をいただきました。最初は必ずしも乗り気ではなかった私たちですが、検討チームの積極的な投げかけを受け、少しずつ「一緒に取り組んでみよう」という姿勢が芽生えました。双方から人が参加して、寸

又峡温泉が置かれている現状や将来への可能性について話し合い、方針決定後は、共に作業や活動に取り組んできました。地域の組合員からは「落ちない大石の存在は知っていたけれど、身近にあり過ぎてその価値に気が付きませんでした。中電の人たちと一緒に取り組む中でその価値を再認識することができました」という声も聞かれるなど、前向きな意識が徐々に定着しつつあります。

手を携えて活動する価値
今年の冬からは「縁日」を定期的に開くなど、新たな活動も始まっています。町内中学生に願かけした絵馬をプレゼントするという活動も実施。町内の人たちにも少しずつ浸透しているのではないのでしょうか。実際に、町内の中学生も何人か訪れてくれたという話も聞いています。昨年製作した絵馬の販売数が600枚を数えるなど、少しずつではありますが効果も現れ始めています。ただ収益や集客などは、そう劇的に変わるものではありません。今後も地道に継続していく中で、少しずつそういった「目に見える効果」も現れてくるのではと期待しています。何よりも、地域住民や検討チームの人など、さまざまな分野の人が手を携え、地域資源である「大石」を守り生かしていくという意識が生まれ、その方向性が見いだされたことに大きな価値があると考えます。私たちに、まだまだアイデアがあります。前向きな意識が芽生えたことで、地域が持つ可能性がさらに広がっていると感じています。



昨年製作した絵馬